

『ベルリン物語集』と国家公安省

酒 井 府

(I)

1995年、ドイツ Suhrkamp 出版社より『ベルリン物語集』と言う文庫本のアンソロジーが出版された。編集者は旧 DDR の三人の作家 Ulrich Plenzdorf, Klaus Schlesinger, Martin Stade である。此の詞華集に作品を寄せたのは上記の三人の他 Günter de Bruyn, Fritz Rudolf Fries, Stefan Heym, Günter Kunert, Rolf Schneider 等十五人の旧 DDR の作家達である。何故此の時期に旧 DDR の作家達の作品集がと言う疑問には此の詞華集の以下のサブタイトルが或る程度答えている。そこには『作戦上の重点 自費出版』とある。前半は旧 DDR の国家保安省、所謂 Stasi の部員が好んで用いた用語である。更にそのタイトルの下には『一つの作家達のアンソロジー。如何にそれが生まれ、Stasi によって妨げられたか』とある。つまり此の作品集は DDR が存在した 1970 年代に出版されるべきものであった。

しかしそれは実現せず此の作品集は抽出の中に死蔵され二十年後に出版される事になり、それ故に此の間の事情を説明する前書きと出版を妨げた Stasi の記録文書と共に出版される事となった。従って本稿では差し当たってこれら前書きと記録文書を紹介解説し、論ずる事を目的にする。

(II)

先ず三人の内、誰が此の作品集の出版と言う考えに至ったのかは些細な事であると編集者は前書きで述べ、その考えは「1965年12月と1971年春の間、つまり Ulbricht 支配下の此の最後の時期よりも Elbe 川と Oder 川間の、バルト海とエルツ山脈間の社会への新しい思考開始、即ち別の視点の為に、より開か

れていると思えた時期に生まれた。」(1)と書いている。最初にその事に就いて話し合ったのは73年秋のWiepersdorfであったのか、同年のAlt-Ruppinでの大晦日であったのかと編集者は思考を巡らした後、「最初の招待状を我々とはともかく74年の最初に送付した——」(2)と記す。

つまり一般的なDDR史への観点に観られる如くUlbricht後の時代をDDRが根本的に変わった時代と彼等は捉えた。此の時期は前書きも触れている如く第八回党大会でUlbrichtからHoneckerへの政権交代があり、国際法上のDDR承認の波があり、様々な民主化の兆しが見られた。「文学では或る新しい世代が世に出て、国家のあの新しい第一人者が、作家達が社会主義的立場から出発したならば文学にはタブー類はあるべきではないと語った文章に伴われた。」(3)と編集者は書き、彼等はタブー云々の文を重視し、社会主義的立場云々の文に困難を予測しなかった。この様な文は権力者が如何に解釈するかに係わる事は予測出来るが、彼等も続けて述べている様に68年に西側の学生達の反権威主義的蜂起があり、チェコスロバキアでの社会主義民主化の試行が見られた事が彼等に解放感を付与した。あの鬱陶しいUlbricht時代を経た事も古い世代の伝統的規範からの脱出に拍車を掛けた事は当然であろう。

それ故に、彼等は以下のように述べる。「我々はかなりの人が70年代後期に討議の中で彼等は此の時代に世界のどの他の場所に於いてもDDRに於けるよりもより自由に感ずる事はあり得なかったと主張したのを思い出す。——自由を移住の自由と取り違えず、そして勿論、その最大の自由はその素材、その作中人物達に対する自由である一人の作家の観点から観て。」(4)続けて編集者は彼等は西側議会の野党と言う概念は用いず、「その批判によって彼等が生きている体系へ組み入れられている事を望み、そう、彼等の批判そのものが批判された者達から心からとは言わずともその事柄の故に期待されるであろうと期待していた社会批判的作家達として、我々は我々を理解していると、我々が言った時、我々は権力へ一つの要請を申請したのだ。」(5)と彼等の立場を説明する。

此処で編集者は当時の正当な現実を述べる。様々な大きな美術展、現在の不完全さを強調し、肯定的よりも否定的側面を持った新聞の記事、更に「ベルリ

ンでは例えば Bettina Wegner が“Eintopp”と呼ばれた催し物で毎月一度、Kloster 通りの若き才能ある者達の家の舞台に登場し、満員の広間の観衆に既知未知の歌手達、作家達、俳優達を紹介し、その後公開討論が行われ、彼等はそこに来ていた西側の通信員達の強制国家 DDR に就いてのあらゆる観念を破壊せざるを得なかった。」(6) 事実である。続けて編集者は次の様な具体的事実に触れる。「此の時代、此の雰囲気の中で或るアンソロジーの為の原文を集めると言う考えが生み出された。——テーマ: ベルリン、DDR の首都、時代: 終戦時より現在迄。それは他のアンソロジーとは、全参加者が全寄稿に就いて知り、それらに就いて協議し、——合意後——また集团的編集人として我々の出版社の一つに対して行動する筈であった事によって区別された筈であった。」(7) 非常に興味溢れる作品集が想定されていたと言える。

当時の編集者達は既知の年輩の Stefan Heym や Christa Wolf の様な作家以外に、より若い未知の作家達を加えたりリストを作成し招待状を創案し、十分長い期間を選び、他の作家達にも提案するよう願ったのである。反響は肯定的で熱狂的であった。例えば 74 年 2 月 22 日 S. Heym は手紙で応え、Stephan Hermlin へ提案し、F. R. Fries は後に寄稿した Uwe Grüning へ提案し、G. d. Bruyn は賞賛に値すると述べ参加の意志を表明し、やはり参加した G. Kunert や結果として参加は出来なかった Sarah Kirsch 等に呼びかけている。やはり最終的には寄稿出来なかった S. Hermlin は最初電話で述べた承諾を守れるかどうか判らないが、企画の成功を祈ると応え、「かなり民主的で」「何時の日か作家達のグループを或る出版社に対する一つの共同の主体へと高める」ので、その方式に賛成した Ch. Wolf は寄稿しなかったが、S. Kirsch, G. Kunert 更に寄稿した Helga Schubert へ提案している。最初に答えてきた Franz Fühmann だけは「我々の招待を或る友好的ではあるが一定のやり方で二つの理由から断る。第一に彼はベルリンに係わりがない事、第二に彼は投票、決議、討議を伴う文学の或る連結を一つの『自殺的要因』であると信ずるからである。」(8) と述べたと編集者は書いている。

(III)

最初の幾つかの原稿は74年の夏に、最後の原稿は75年春に到着したのであり、二〇〇頁に及び、その中には Hans Ulrich Klingler, Heide Härtl, Gert Neumann (Härtl) の様な若い未知な作家達の原稿があったと編集者は記し、初校が75年5月に複写されそれ迄の十八人の作家達に送付された後に到着した Wolfgang Landgraf, Erich Köhler の作品は採用出来なかった事実にも言及している。「作品集は好都合に不均衡で、それらはグロテスク調から印象に迄、クラシックなショートストーリーから言語実験に迄及んだ。参加者達の反応は彼等の原稿同様様々であった。」と編集者は更に語り、特別な緊張感で読んだと言う見解もあり、「アンソロジーは当局の抵抗に会うのみならず、どんな出版社も見出さないであろう。」(9) と Plenzdorf と彼自身の原稿を指摘し、他の作家達への負担を憂慮し、経過済みの会合に対して弁明して、採用作品の選択を代表に任せる提案をした Heym の意見もあった事に触れている。

75年9月10日ベルリンの Becher クラブに招待された十八人の内十人のみが集まったが、少人数の集会に関する不安定な雰囲気と基礎的なデモクラシーに就いての経験不足から来た不安定さがあり、この会合14日後、此のアンソロジーの全作家達に送付された回状はその決議を以下のように説明している。第一に原稿は未だどの出版社にも提出されるべきでなかった事、第二に個々の寄稿に就いての討議は延期された事、第三になお別の作家達を招待すると決定された事である。二・三人の名前が挙げられ、様々な更なる決議がなされたが、それらの内、最も重要な幾つかは彼等の同志のほぼ半数に接続法的な言い回しでなされざるを得なかったと書かれている。

上述の集会の成果が如何に複雑に見えたにしても、当時此の企画を成功させる確固とした意図を持っていた事を述べ、新しい招待状を書き始め、「作家同盟の通知」の為の声明文を作成し、それを全関与者に送付し、賛成または拒絶を待ち、更なる原稿と提案、拒否と敬遠も得たと招待者は語り、Kunert, de Bruyn, Heym のその時の反応に触れている。数週間以内に原稿は三百五十頁に脹らみ、更なる寄稿が告げられたが、76年3月5日に予定された次期の会合

をより良く準備しようと企てた時、党と Stasi と作家同盟が既に彼等の出版計画終結の警鐘を開始したと書かれている。

「75 年秋に政治的風土が決定的に変化した。」(10) と述べ、編集者は新しい活動をしようとした者が至る所で困難に逢着した例を挙げる。作品朗読は見えない理由で拒否され、西への旅行は延期または不許可となった。あの“Eintopp”は著しく国家の干渉にあった。Ulbricht 時代に禁止されていたその三冊の本が第八回党大会以降出版された Heym は新しい作品集で再び出版拒否に直面した。そこで彼等は反撃もし、「ベルリンの作家同盟では Heym は文化官僚の無能力な介入に対する手段として作家達の或る種の出版社を要請し、」(11) Schlesinger は Plenzdorf に朗読や批評やインタビューの際に起こった様々な困難に就いて語った。それに対し Hermann Kant が即座に飛び上がり、事態を取り上げると申し出て具体的な事例を要請し、四つの事件が資料で証明され、彼に文書で伝達されたが、長いこと回答がなかったと編集者は記し、「背後には抑制の一つの方法が潜んでいたと我々が理解するまで若干の時間がかかった。」(12) と更に述べるが、直接誰かを批判してはいず、抑制の或る方法の責任者は誰か判断出来ない。しかしその後で Honecker が政治局の保守的な部分との間に困難を抱えていたと言う中央委員会からの伝達は当時の状況を知る上で興味深い。彼等はそれでも先へ進んだと編集者は述べている。

やがて情報局の言葉で意図的偽情報 (Desinformation)、日常語で噂 (Gerücht) と呼ばれているものが流された事実に言及する。彼等がアンソロジーで行動基盤を築こうとしているとか、アンソロジーの自費出版を企図していたとか、その本を五万部市場に出そうとしている西側の Molden 出版社と既に連絡しているとか、彼等の間に争いがあり、多くの参加者が既に敬遠したとかである。彼等は出来る限り否定したが、同僚達の顔にはしばしば懐疑の表情が浮かんだと書かれている。その結果 76 年 1 月 27 日 W. Landgraf がその作品を引き上げたいと書簡を送り、話し合いの用意がある事、この希望に満ちて始まった企画がこの様に終わるのを見るのは残念であると書いてきた事実に編集者は言及している。

終わりは考えていなかったと記し、作家同盟がアンソロジーの参加者達に働きかけたが成果を挙げなかったと耳にしたと述べ、作家同盟の「ベルリンアンソロジー」書類に何人かの作家達との対話メモが残っている事実にも編集者は触れている。同じ書類の中に見られるのは Schlesinger が2月初めに作家同盟第一書記 Gerhard Henniger へ書いた書簡で、或る辛辣な嘲りに満ちており、その一部をこの男自らが広めた上述の噂の数々を通知し、それらの噂の過ちを説明して参加者達の名のもとに否定するよう要請している。書簡は回答を期待していなかったが、彼等が事件の「描写」を当時同盟会長であった Anna Seghers や、社会主義統一党（SED）中央委員会、文化部門、文化省等に送付した時は、相手は反応したと書かれている。それはタイプ紙四頁でアンソロジーに就いて、不当な非難に就いて述べ、それには個々に反論した。不条理な主張に対しての反論は容易であると彼等は信じたのであるが、イデオロギー上の非難——「行動基盤の構築」或いは「国家的出版構造の破壊の試み」と言う非難のような——に挑戦するのはかなり困難であったと書いている。後者の非難の言葉は企画の「部分的に生産組合的な側面」と言う指摘によって一つの進歩的な、個々に生産する作家達の間関係を促進する企てとして説明し得たが、前者の「行動基盤の構築」と言う言葉は拒絶のスターリン主義的手段からの概念であり、不条理な領域への一つの怒りの否認を込めてのみ指摘された、と編集者は語っている。

その上彼等は最近二年間の政治的变化への警告的な指摘を加えている。作家達は十分に熟慮された雰囲気が必要としたアンソロジーの実験的な性格を意識したのであり、その雰囲気を彼等は第八回党大会以降の文化政策方針の中に感じ、この企画でその意向に従ったと信じたのである。「作家達はどんな論争も恐れなかったが、彼等の実験は従属、拒絶及び陰謀から自由な雰囲気の中でのみ成功し得ると知っていた。」(13) とある。

(IV)

彼等の記憶によると或る金曜日、病気であった Stade を除き、Plenzdorf、

Schlesinger は Karl — Liebknecht 通りの新築家屋で後から来て後の席に座った H, Kant を含めて G, Görlich, R, Kerndl, Henniger, M, Küchler の五人の役員と会った。作家同盟ベルリン地区役員が中心であり、後の席に座った Kant がその最中に一度だけ彼の沈黙を破ったとある所に私は彼の微妙な立場を見るが、有罪宣告ではなく解明であるとの約束の下に話し合いが始まった。此処で編集者は「非公式協力者《Martin》と《Hermann》が国家公安省へ提供した報告は話し合いの事実上の経過に就いて僅かしか言わず、その起草者の精神に就いて多くを言っている。所々此の報告は犯罪者達の誤った主張に多くの証拠との対決を通して反証する事が尋問者達に成功した或る尋問の記録の様に読まれた。我々は全時間我々の立場に就いて擁護し、意気消沈して三時間後に再び路上に出た事を思い出す。我々の論拠の何一つ同意されなかった。結果は当初から確立していたに違いなかった。」(14) Stasi の姑息で卑劣な手段と実態が、役員達の官僚的な頭脳の固陋ぶりが伺える文章である。

以上の様に 76 年にアンソロジーが出版されなかった事情の経過に触れた後、編集者は 95 年に出版された本書の構成に言及する。此処に印刷された原稿は彼等のアンソロジーの 75 年春完成された初校の原稿に相応し、その後送られた物語は Joachim Walther の物を除き、最早彼等の手中にはなく、その原稿を引き下げた Uwe Kant はそれを今回も用立てるつもりはなかったと書かれている。文書による部分の基礎は国家公安省が 75 年より 76 年に実施した『作戦上の重点「自費出版」』の書類である。作家同盟の書類からは、党と同盟と国家公安省の間の協力を明らかにする文書が選ばれ、それ以外に国家公安省が B. Wegner と Schlesinger に就いて当てはめた『作戦上の事象「濫作家」』よりの彼等の企画に関する二・三の非公式協力者の報告と非公式協力者《Hermann》と《Martin》の書類よりの報告が年代順に選ばれている。此処で編集者は上述の協力者の後者は当時の作家同盟副会長、あのベルリン地区議長であるとコメントを加えている。Görlich であろうか？

興味深い事は編集者が非公式協力者の報告は《全くの真実》を含んでいる事があると述べ、例えば Kunert, Schneider, de Bruyn に就いての報告がそうで

あると語り、それに至る理由を記している事である。ファンタジーに溢れた一つのとりわけ著しい例を提供しているのは非公式協力者 (IM) 《Andre》の作品であると述べ、その人物を特定し、彼等の密接な友人の一人と短い期間結婚していた一女性 IM 《Büchner》の報告と後になってアンソロジーの作家達の仲間に合流した IM 《Heinrich》の報告は懐疑の念で読まれると書いているのも興味を引く。「或る話し合いと話し合いの記録の間に様々な世界がある。」と述べてから、編集者は「我々は我々の読者達に秘密情報員の監視の主体と客体の間を鋭く分ける事を喜んで要請したであらう—それが我々自身に成功したならば。」(15)と書き、例えば IM 《Heinrich》の事に言及する。アンソロジーの主唱者達に探りを入れる為に近づいた彼は彼等から原稿を提出するよう要請された時、ますます強く作家としての関心に相応する考えの渦中に陥ったのであり、彼はアンソロジーの作家達を擁護し、彼は主唱者達を Stasi に「描写した」反動として Stasi の書類には存在しない一通の三頁の書簡をさえ彼等に送り、その中で事実彼もその原稿を引き下げるよう要請され、それに同意出来ない事、DDR の作家同盟には既に長い間、社会主義的作家個人の必然的に新しい自明の理がある事、作家達は政治的イデオロギー上の責任を所有する事を述べ、此の共同の企画は彼等の文学生活の豊潤化になると書いている。

編集者は「彼のアンガージュマンを単なる巧みな信頼を築く偽装と見るのは単純すぎるであろうと考える。作家として彼は原稿に干渉してくる検閲のささやかな試みの下に正に我々各人と同様に悩み、彼は作家達の役割と主権を国家機関に対して強化する事に関心を抱いている。」(16)と記し、更に此の彼自身が Schlesinger を訪ねた時、後者が非常に疑い深く彼のポケットを覗いたり、彼の上着を彼に着せる時揺さぶったりした事を認めている。

一方 77 年 5 月 23 日の彼の記録によれば「Schlesinger の周囲の人々には物語集——文学が問題ではなく、それらを公表する手段方法が問題である。彼等はただ人々を周囲に集め、我々の出版政策に対する行動基盤を築こうとした。」(17)とあり、それを国家公安省の指導将校は高く評価している。即ち編集者は権力の主体または客体と言う型への行動する人物達の整理の難しさ、権力機

関の機構を解明する為に上述の整理はやはり重要でない事を述べており、これらの書類を読む際に主導者達も同僚達も、更に国家公安省の秘密情報員達もそこに居る非現実的で低俗な世界が生ずると書いている。

続けて「我々を多くの報告の不鮮明さが、決して秘密にされなかった我々の諸活動が当局によって一年以上知られなかったと言う事実と同様、驚かした。」(18)と編集者は語り、IM《Andre》がその指導将校に既に75年3月にアンソロジーに就いて語ったのに、此の情報が、その部門が相互に隔絶されていた国家公安省の構造の故に、アンソロジー企画が本格的になった時、明らかに初めて重要になった事実を指摘する。国家公安省の対抗措置は彼等の最初にして唯一の会合直後の75年11月に非常に激しい陰謀めいたエネルギーで始まったとある。そこで「国家公安省将校達の文化管轄主要部門XXの長Kienberg将軍との協議で、手書きで記録され以下の全措置を公認する決定的文章が起草される。つまり『党はアンソロジー出版を阻止すべく決断した。国家公安省は人々を管理すべし。』」(19)と言うのである。情報が集中し、最高権力者達は此の事件に係わり、国家公安相Mielkeは第一書記に「個人的に」捜査の状況を多くの「誤認評価」共々報告する。それによれば当初よりHeymがイデオロギー上の指導者とされている。

それ故に当時よりほぼ二十年を経て、様々な文書を知った後の94年、彼等が生き働いてきた組織制度は改良可能であると言う誤解に彼等の計画は立っていたのかと彼等は自問し、「我々は振り返り、我々の幻想に微笑する。しかし我々はまた権力との粘り強い闘いを思い出す。それは時々二・三の言葉を巡る闘いであったが、常に社会の道徳的中心の場所を巡っての闘いであった。」(20)と答えている時、社会主義の理念実現を巡って私自身思考し、その実現を志向せざるを得ない。76年9月国家公安省が「作戦上の素材《自費出版》の作戦上の処理の目的設定は達成さる。」(21)と書いた事に触れ、編集者はその二ヶ月後の11月16日、Wolf Biermannの市民権剥奪の日に権力はより公然と姿を現したが、その反響は権力はその終末を迎えた日々迄続いた事を述べ、前書きを閉じる。

(V)

記録文書の最初の物はベルリン発の74年1月20日付け書簡である。内容は作家達宛のアンソロジー『ベルリン物語集』への Plenzdorf, Schlesinger, Stade 三人よりの招待状である。ジャンルには拘らず、自伝的な物でもフィクションでも良いと記され、上述の如くストーリーの時代は終戦時より現在、または少しばかりそれを越えた時代とされ、政治的地理学はベルリン— DDR の首都、その都市の特殊な政治的状况に由来するあの様々な問題を含めて——と書かれている。続けて「アンソロジーの編集者は全ての参加者となるべきである。つまりどの作家も全ての原稿を知る権利を有する。その後彼は他の原文に対し異議を申し立てる事が出来る。その後彼はその原文を引き上げるかどうかも決定出来る。その巻が全ての参加者から受け入れられた時初めて、その巻は或る出版社に提出される。財政上の危険は全ての作家達が担う。利益は量的な尺度に従い分配される。全ての決議は多数決によって決められる。」(22)と記載されている。更にその巻は二百五十から三百五十頁になると予想し、十五人から二十人の作家達を計算に入れ、一人当たりのページ数を十から二十頁とし、その年末迄完成し送られたしとある。その後原文はプリントされ各作家に送られ、75年1月または2月に彼等は集まり、それらの原文に関して決定したいとも書かれている。当時の DDR の出版状況を乗り越えた興味深い企画であった。

その時期迄はその巻の調整は三人の手であり、彼等の最初の会合後に二・三人の対外代表を撰びたいと述べ、それ迄掛かった費用は差し当たって三人によって立て替えられる事に触れ、それ迄協力に関心を示した彼等を含めた七人の作家達の名を挙げ、更に招待しようとしている七人の名を記している。その上でより若い未知の作家達の招待を考慮に入れ、書簡の受領人達に紹介の労を要請しているのは前書きにある通りである。

此の書簡に続き既に75年春に始まった国家公安省への非公式協力者達の監視に基づく情報が三通収録されている。先ずベルリン発75年3月29日付けの Wi/lüc による XX/7 部門(文化文学領域管轄一部門)宛の情報で、IM 《Andre》との3月25日の会合に基づくもので、『作家グループ Schlesinger-Plenzdorf-

Stade』と云うタイトルである。75年3月15日、電話で予告した様に Stade が上述の IM の住居を訪れ、二・三時間滞在して Schlesinger の所へ行こうとした事、その際に前者が後者に予告済みのいわゆる作家達の出版社形成に就いて話し、それはどんな場合でも国家と党公認の企画にはならず、「その熟慮に当たってはただ一面では相互に物質的に支え合い、原始的な方法で文学をプリントし、大衆の中にもたらし為に、ドイツ社会主義統一党の文化政策に対するそのイデオロギー上の立場に応じてその著作公表に際し諸困難を持つであろう作家達を組織的に何らか結集する事が重要である。」(23)と述べた事が記されている。そして差し当たり当時の Biermann の出演禁止から派生した実践、即ち多くの若い人達が Biermann の作品を西側の印刷物から書き写し、此の方法で広める術を見出した様な実践が説かれ、「多くの若い人達の此の自発的反應は今や一つの組織された形体へ変えられつつある一つの形体であり、その為にはともかく一定の組織形体が必要であり、その組織形体を此のいわゆる作家達の出版社が示すべきである。」(24)と述べられた事も記載されている。此の熟慮の発案者に、上述の Schlesinger, Plenzdorf が挙げられ、此の理念の背後になお何人かの著名な作家達がいる事が語られている。更に近い内に Schlesinger の住居で此の計画の為に多くの協議が行われると Stade は述べ、IM《Andre》に此の計画への参加を要請している。後者はすぐに納得せず考える時間を要請し、その理由として一定の反対派結成のこの方法では国家による処置によって絶対的な文学的孤立に追いやられる危険が生ずるのは明瞭である事を挙げる。それに対し前者はその危険は明らかであるが党の検閲を避ける出口はそれでも少なくとも一定の時期には無いと答えている。Stade の IM《Andre》への無警戒と信頼感が余りにも明らかな場面であり、今や周知の Stasi の実態である。

上述と同じ部門に宛てられた Wild 少佐の4月19日付けの情報は『フリーの作家、Plenzdorf, Stade 及び Schlesinger』と云うタイトルで、やはり4月16日の IM《Andre》との会合に基づいている。此の IM は4月上半期に Stade と対話をする多くの機会を持ち、その際にあの作家達の出版社形成の話しが何よりも重要な役割を演じたのである。Stade はその意図は依然としてであると説

明した。しかし或る研究滞在の為の Plenzdorf の USA 旅行前に Schlesinger の住居で上述の三人の間でなお協議が行われ、「その様な出版社形成の為に、どんな組織的な活動も行わない。」との見解に到ったのである。「党と国家機関が彼等に余りにも強く『狙い』を定め、『Stasi』もその人々を彼等の周囲に配置した。この様な状況では事態を『あからさまの対決』へ到らせるのは賢明ではない。」(25)と云うわけである。Stade の見解は延期されたのであり、断念では無い。Plenzdorf の USA 滞在中も『更なる同意見の人々』を募る事が決められ、その関連で此処でも改めて Stade は此の IM にその様な出版社での協力を就いて問い合わせている。彼は作家であるのみならず、多くの編集顧問としての経験があるからその協力に関心があると云うわけである。Stade はまた此の IM に Plenzdorf の USA 研究旅行は DDR 作家同盟とニューヨーク大学ドイツ学研究所間に長期の協定が締結され、USA サイドが内容上また時期的に 75 年の Plenzdorf に強く固執した事も述べている。

更に同じ部門宛の Holm 少尉の情報は四ヶ月半後の 9 月 3 日付けであり、IM 《Büchner》に由来している。三人の作家達のいわゆる『作家達の出版社』企画に就いての情報であり、例の三人が目下『古ベルリン物語集』のタイトル下にアンソロジー完成に従事していると云う文言に始まる。そのアンソロジーには全部で十八人の DDR の作家達が参加し、既に挙げた者達以外にとりわけ、H. Kant, U. Kant, S. Heym, Ch. Wolf, G. d. Bruyn, F-R. Fries が知らされていると書かれている。その編集に当たっては Stade の見解によれば従来の通常の編集の場合よりは民主的な全ての作家達の協議権があると報告され、その方法に就いては既に本稿で触れられてきた事が繰り返されている。更に集まった原文に関して、いわゆる『作家会議』で 9 月 10 日か 18 日協議される筈であり、その他に共同の決議が行われ、印刷許可と編集技術上の成果を得て、全計画を法制化する為に、DDR の或る出版社に赴くとされている。そこで目下考慮中の DDR 出版社の名が挙げられ、それ迄かかった費用と出版費の見積もりが触れられ、アンソロジーの実験的性格上、参加する作家達は過度な印税の要求をしないように要請されると云う事も報告書に述べられている。

此の情報の最後で、我々の IM は目下、計画されている作家会議の正確な時期と場所を知る事は残念ながら出来なかったと述べられているが、彼は医者 of Stefan Schnitzler から Stade が DDR の出版社が見積もりの上で応じなかった場合西側の出版社も考慮されようと発言した事を聞いたと記されている。

(VI)

次に掲載されている資料は 75 年 9 月 10 日のアンソロジーグループの集會に關する報告を兼ねた 9 月 25 日付けの三人の回状であり、前述した決議内容以外に新しく招待した作家達に同年 12 月 31 日の原稿提出期限を通知し、同意の回答に際しては既に集まった原稿を回覽に供する事、全ての作家達の次期集會を 76 年 3 月 5 日に決めた事、記者用説明文を起草し『作家同盟會報』に公表の為提出する事(9 月 10 日に出席出来なかった作家達の同意を前提とし、その原文を同封して賛否保留を要請した上で)、二回目の原稿編集を担当する三人の作家として Klingler, de Bruyn, Kunert が撰ばれ、後者二人はまだ同意していない事、彼等から同意を得られなかった場合は今まで通りの三人が更に担当する事、新しい作家達に貸し出される様に、回覽に供した既に集まった原稿を Schlesinger に送り返す事、それらの原稿の諸費用は今まで千二百五十マルクとなり、三人が立て替えたので十八人の参加者一人当たりほぼ七十マルクとなり、その額を Schlesinger の郵便コントに振り込むべき事が書かれている。このアンソロジー出版予定の過程が非常に民主的であった事が判り興味深い。

それに続く記録文書は非常に長い詳細なベルリン発 75 年 11 月 10 日付けの国家公安省宛の物で、極秘！ 請う返還！ と宛名の下に記載されている。情報提供者は明示されていない。タイトルは『原稿審査係排除の下 DDR の多くの作家達による物語のアンソロジー準備に関する情報』となっている。この文庫本の前書きで書かれている「75 年秋に政治的風土が決定的に変化した。」と云う証拠と言える。そこでは改めて前述の情報に基づく事がより詳細に述べられている。即ち DDR のかなり多くの作家達が『ベルリン物語集』と云うタイトルの下アンソロジーを編集し、DDR の出版社に訂正なしの出版の為に提出

する為に集まった事、彼等の考えによれば、その未定の出版社には最後通告的に印刷技術上の製作と引き渡しの為にのみ任せられる印刷済みの原稿が出来上がる事を述べてから此の情報提供者は次の様に書いている。「出版及び書籍販売中央官庁の側からの印刷許可処置の枠内での、または圧力で委任された出版社による物語の内容の変更及び訂正を参加した作家達は一致して拒絶し受け入れない筈である。それによって彼等は原稿審査係の機能を『検閲として』締め出そうと意図している。参加した作家達何人かの見解によればそれによって作家達の自己責任と『検閲』不承認の一つの実例が作られる筈である。」(26)と。続けて或る作家が西側での出版の可能性が場合によっては考えられ得ると発言した事、主唱者は三人で74年以来同意者達を集め、同意しないと思われる者達に対しては自己を護り知らせなかったとも此の情報は述べている。そして『検閲締め出し』等の条件の下、原稿を提出した十八人の名前と作品名を列挙している。

此の情報で興味深いのは S. Hermlin, Ch. Wolf, F. Fühmann が参加を断念した事を強調し、此の文庫本の前書きにある様なその理由と姿勢に詳細に触れていない点である。しかしアンソロジーが現在二〇〇頁になり、全作家の査定に附せられ、未だ時期が確定していない全作家の集会で協議されまたは変更される事、可能な出版社として今迄 Buchverlag 《Der Morgen》, der Hinstorff Verlag Rostock, Aufbau Verlag Berlin und Weimar が挙げられ、最終的に《Der Morgen》が選択された事が言及されている。

続けて此の情報提供者は次の様な結論を下す。「専門家達による原稿の最初の査定では DDR に於ける他の物と差異を付けない印刷はどんな場合でも不可能である。様々な寄稿の中に明らかに敵対的な、社会主義を中傷する叙述があるからだ。」と述べ、更に「DDR の首都ベルリンは作家達の思いの中では個人的な運命、体験、経験及び失望の実り多き焦点として、同様に社会主義国家とその制度の為の試金石として物語的に描かれている。その際、一つの決定的に批判的な根本的主旨が支配的で、それは個々の寄稿では反社会主義的発言に迄到っている。」(27)と云う基礎的理念に纏められると云う。その上此の情報提

供者は原稿纏めの責任者として、明らかに政治的イデオロギー上の批判的で否定的な発言の中心人物 Heim の名を挙げ、その様な意味で問題な論評の例に de Bruyn, Gert Hürtl, Klingler, Plenzdorf の作品を挙げる。従って彼の決め付けは以下の様に進展する。

「原稿は個々の寄稿が偶然に編集されたのではないと云う事を示唆している。此の企画の或る構成上の相談と指導は疑いなくだろう。明らかに組織者達は社会主義リアリズムの本来の本質への批判的な面を高め、或いは要するに社会主義内部に『批判的リアリズム』を生み出す事に左右された。」(28) 更に専門家達によると個々の寄稿には以下のテーゼが代表的なものと見られると報告し、それを以下の如く挙げ、それに係わる作家の作品を語る。

——DDR の国家と国家機関は独断的で無情な狭さによって指導されているのであろう。一つの通過出来る国境が社会主義への本当のまたは強制された忠誠の試金石なのであろう。

その例として S. Heym の作品『吾がリヒャルト』(Mein Richard) を挙げ、それが当局によって既に彼の作品集からは削除されたと述べている。

——DDR に於ける社会主義の社会体系は個々人には見通し出来ない。個々人は疎外され、操作されている。テロルが存在しているが、疎外のプロセスの結果、それは客観の対象にはならず、具体的に把握されず指摘されない云々。

その例として Gert Härtl の寄稿『ボウリングに就いて』(Vom Bowling) が挙げられ、それは明らかに個人的な知性的傲慢と云う印象を与えるが、意図的な此の物語集の本来の理論的根拠づけになっていると書かれている。

——DDR に於ける社会主義は特権によって特徴付けられている。一般の国民は成果に与らないか、或いは遙かに遅く与る。指導者達と役員達の不正がある。

その例として de Bruyn の寄稿『不法監禁』(Freiheitsberaubung) が挙げられる。多くの寄稿にはまた居住問題が取り扱われ、特権階級のベルリンに対し本来のプロレタリア的ベルリンが擁護されていると報告されている。

——DDR には或る芸術祭継続の為の一種の『展示の自由』のみがある。現

実は抑圧的な見の狭さ、専横、強制である。

その例として H. U. Klingler の『月曜日にはハンマーがおりた』(Am Montag fiel der Hammer) が挙げられ、そこでは憎しみと攻撃的調子が支配的で、取り分け人民警察と故役員達に向けられていると書かれている。

——公式のプロパガンダの言葉による美化と例えば特権のない青年達の現実的な体験には大きな矛盾がある。

その例には Plenzdorf の『下にも遠くにも』(kein runter kein fern) が挙げられている。

——1961年の国境の確保は DDR の社会にとって一般的な意味でも主観的、個人的意味でも典型的な出来事である。

その例には Schlesinger の『青春の終わりに』(Am Ende der Jugend) が挙げられている。

——役員は必然的に現実性の感覚を失うようにおびやかされている。

その例には Stade の『全てを二重に見た者について』(Von einem, der alles doppelt sah) が挙げられている。

この様に此の情報提供者にとって否定的なテーゼを彼は挙げてから、残りの十一人の寄稿は直接には明らかに否定的ではないので受け入れられると述べている。更に彼は若い作家達が此のアンソロジーに参加した理由として公に認められた事、印刷許可と『検閲』廃止を導く議論を計算に入れた事を挙げている。そして74年11月13日の作家同盟ベルリン地区集会での此の事に関する Heym, Schlesinger, Joachim Seyppel の発言に触れ、それを社会主義に敵対的と決め付けている。続けて幾つかのアンソロジー参加者の内的な当局との対決を覚悟した発言も論評している。その上で彼はこれらの作家達の更なる行動を管理する処置が国家公安省で執られた事を述べ、今後も様々な処置を執り、否定的な敵対的勢力を孤立させる為に DDR の他の公表機関での有用な寄稿を公表すべきであろうと国家公安省に提案する。最後に此の情報はその情報源を危険に晒す故に個人的な参考とされたしと記載されている。

(VII)

次の記録文書はドイツ社会主義統一党中央委員会文化部門の教授 Heldt 博士に宛てた作家同盟第一書記 G. Henniger の 75 年 11 月 20 日の報告であり、企画『ベルリン物語集』に関する覚え書きを同封している。その覚え書きの中で例の三人の編集委員が 75 年 10 月 1 日に一連の作家達に送付した書簡を更に同封すると述べ、Wolfgang Kohlhaase がそれを 11 月 13 日ベルリン作家同盟の党指導部に呈示したと報告している。

次にアンソロジー参加者の一人同志 Jürgen Leskien が説明した様に自費出版の事、75 年 9 月 10 日の参加者の集会で同志 G. Künert, Leskien が彼等の更なる参加の条件としてアンソロジーが出版されるべき事、ベルリン作家同盟を通して全作家に参加可能な意図を知らせるべき事を挙げたと書かれている。興味深い事は上記の三人の作家が同志と呼ばれている事である。続けて上述の 11 月 13 日の党指導部会議で以下の様な論評と見解があったと述べその内容が記されている。

同志 Kohlhaase はアンソロジー編集の為の集会を正当と認めるが、此のアンソロジーの問題性を意識しているので参加はしない。同志 Ruth Werner はその様な企画に反対である。此の計画を事情によっては一定の作家グループの規則的会合の口実に利用出来る Heym が背後に立つであろうと云う理由で。同志 Paul Herbert Freyer も反対した。

同志 Henniger はアンソロジーの成立形式に注意を指摘し、その結果出版社には「はい」か「いいえ」を云い、技術上の請負として仕事をするのみが残されていると主張し、その様な西側方式は確かに非常に民主主義的なふりをしているが、何れ撤退の権利のみがある個々の作家の立腹に到るであろうし、作家達と出版社の争いの素材になろうと述べた。

同志 Karl-Heinz Jakobs はこの考えに加わり、一年前に既に参加要請の手紙を受けたと説明し、元々参加の意図を抱いたが期限を守れなかった事、事態はとくに終了したと受け入れたが、いま更なる作家達が招待されるのに驚いている事等を述べるが、彼はその様な計画を正当と見なしている。勿論、出版社

との関係に関しては既に同志 Henniger が述べた様な考えを抱いていた。同志 Cwojdrak は何も発言せず、同志 Küchler は此の問題を熟考し、次の会議で更に討議するべく最終的に提案した。

続く 75 年 11 月 22 日付け文書は、確認済み、作戦上の代理人 Hähnel 中佐と記載された例の国家公安省 XX/7 部門への物で、「措置計画」と言うタイトルで更に「政治的作戦上の重点『自費出版』の事件に適した処理」と言うサブタイトルもある。先ず問題の人物達の作戦上の処理及び管理に関する既存の作戦計画を補足しつつ以下の諸措置が執られると書かれ、様々な人物達に関する様々な国家公安省職員等の情報が網羅されている。

1. は Schlesinger に関する情報で、先ず『自費出版』の枠内での彼の活動の追求が 75 年初頭以来引き続き成功し、75 年 8 月にこれに加えて確認された作戦計画は完全な有効性を維持していると記され、また IM 《Büchner》, 《Andrè》, 《Karl》が近い将来に今まで以上に Schlesinger より信頼される様に彼等の彼への接触を強化する方向を維持していると書かれている。

続いてそれぞれの IM の場合が言及される。《Büchner》(29) は取り分けその原稿審査係としての活動と Schlesinger 夫人 B. Wegner との親密な諸関係を利用し、様々な成果を挙げる可能性が、《Andrè》は Stade への接触を維持し、彼を媒介して Schlesinger への信頼関係を確立し、その際原稿審査係及び作家、更に出版専門家としての経験と関係を明瞭にするであろう事が、《Karl》は党、国家機関、作家同盟及び国家公安省への彼らの反応に関する重要で時事的な情報を手に入れる為、取り分け Schlesinger-Wegner 家への家族的接触を強化するであろう事が触れられている。そしてその報告期限が 12 月 5 日とされている。

《Vera》, 《Pergamon》及び《Steinhopf》もやはり Wegner への彼等の関係を利用する様に方向付けられている事、その際彼女の指導者としての役割も注意すべき事も記されている。この三人の IM はそれ迄の諸活動から Schlesinger の関心を引きつけるのに適していると書かれ、その報告期限はやはり 12 月 5 日とされている。

更に IM 《Büchner》と《Karl》の協力と公の文書の利用によって Schlesinger とその妻の筆跡及びタイプ文字が筆跡鑑定されカード式目録にファイルされるように調達され得ると書かれ、その期限も 12 月 5 日とされている。

同じく 12 月 5 日までに部門 26 の作戦計画に予定されている措置が促進され、徹底的に実施され、既に度々示された電話監視の提案が更新されるとの記述の後に、「『ベルリン物語集の為の資料収集』と云う公の理由を伴う Schlesinger の数度の西ベルリン滞在に、如何に作家同盟の出張提案と文化省による許可が行われたか、一般的協力者《Helga》を通してもう一度根本的に吟味されたし」とあり、「その吟味は、Schlesinger が社会及び国家の役員達の政治的無知と善意を利用したのか、彼の敵対的諸計画の為の意識的促進と支持を見出しているのかに就いて説明すべきである。」(30)とあり国家公安省の狼狽を見る思いがある。此の事に就いての期限は 12 月 20 日になっている。

また物語集編集者三人による Seelow 郡 Altrosental の週末休暇用土地獲得の目的、動機、方法を知る為に IM 《Büchner》,《Karl》,《Andrè》は、Schlesinger/Wegner 家への信頼関係確立の一般的任務に此の土地の出来る限り頻繁な訪問を組み入れるように指導されるであろうとも書かれ、そして国家公安省 Seelow 郡役所との関係での調整諸措置が出来る限り早急に実現されると記されている。国家公安省の用意周到さとその措置の徹底ぶりには驚かされる。その指導の期限は 12 月 5 日、調整協定の実現の期限は 12 月 30 日と設定されている。

2. は Hansdieter Schubert に係わる情報である。彼も十八人の作家の一人である。先ず処理は事件に適した既存の IM の先駆的書類の枠内で成功していると述べてから、更なる処理の目標はその人物への啓発の仕事を終了し、無理な伝説作成の為に始まった作戦上の連想を非公式協力獲得の為に終了する事であると、最初の接触の対話期限を 76 年 1 月 15 日に設定している。

次に文学的活動と彼の更なる政治的イデオロギー上の発展の管理に既に接触のある IM 《Jäger》が指名される事、彼の作家同盟に於ける公の登場は IM 《Andrè》,《Walter》及び一般的協力者《Helga》の助力の下監視される事、IM

指名の目標は彼 Schubert と Schlesinger 間の或る差異のプロセスを政治的作戦上のやり方で可能にする点にあると書かれ、IM 指導の期限は 12 月 5 日とされている。国家公安省の綿密にして陰險な作戦と言えよう。更にこれらの作戦実施の為に 12 月 15 日を期限として部門 26 に於ける電話監視が実行されると書かれている。

3. は同様にアンソロジー寄稿者 Elke Erb に係わる情報である。

Erb に対しては作戦上の人物管理と云う形で事件に適した処理が開始され得るとし、その目標を彼女が Schlesinger の影響の下に、既に確固としたイデオロギー上、否定的な姿勢を取っているのか、動揺しているのか、或いは忠誠心があると評価されるのかに就いて、作戦上言明し得る観念を作成する事に設定している。作戦上の人物管理の提案期限は 12 月 15 日とされている。

次に上述の人物管理の別個な措置計画作成前に、住居区探索を導入し、彼女の今までの文学的な仕事に就いての概観を入手し、どの出版社の為に彼女が仕事をしたのか確認する為に、国家公安省と人民警察に蓄積されて来た物全てが必要であるとされ、期限は 12 月 10 日に定められている。

続いて、彼女の夫を把握している主要部門 XX/7 との調整によって、夫の処理のやり方を経て彼女の管理の如何なる可能性が存在するのか 12 月 10 日まで吟味される事、一般的協力者《Helga》を経て彼女の筆跡及びタイプ文字が調達され、XX/2 を経て筆跡比較をさせ、筆跡文書をカード式目録にやはり 12 月 10 日までファイルされる事が記されている。此処にも国家公安局の綿密な作戦が見られる。

4. はやはりアンソロジー寄稿者 Helga Schubert に係わる。

その項目は上述の Erb の場合と夫の処理のやり方云々以外同じである。

5. は上述の四人の場合とは異なり IM 《Roman》なる人物に係わっている。先ず相応した処方改訂によって更なる協力は、此の IM が作家サークルに於ける、取り分け Plenzdorf と Schlesinger への彼の接触に就いて自ずと道徳的に義務づけられる様に形作られるとされ、更なる協力の目標は何はさておき此の IM に『自費出版』に対するそのイデオロギー上の無知を自覚させ、彼

をこの企画の指導者の政治的目標確立に対する拒否的な位置に向ける事に設定されねばならぬとされ、この教育目標が達成された場合、どの様な形で此のIMを濫作家達と『自費出版』の積極的処理に関係づけられるか決定されると書かれ、1月15日が期限とされている。

次に此のIMの信頼性の度合いと政治的イデオロギー上教育効果の度合いの吟味に部門26に於ける電話監視の実施が根拠にされると書かれている。

6. は指導的諸措置となっており、作戦上の重点『自費出版』の為に実施される諸措置に対し専門部門XX/7の指導者Wild少佐が全責任を負い、管理はXX部門指導者代理Bronder少佐を通して代表される事、他の業務部門との必要な調整諸措置に対しては前者が責任を負う事、更に重点『自費出版』の為の全処理結果収集の為に一つの調整書類が添えられ、この資料の整然とした取り扱いに対してはHolm少尉が責任者とされる事が記載されている。最後にPrenzlauer Bergの中心部にある別の業務部門の信頼できるIMを『自費出版』の処理へ関係させる如何なる可能性があるのか吟味されるとあり、此の11月22日付けの長い文書は終わる。

(注)なおIM《Andre》は此の文書では《Andrè》となっており、IMにもIMB, IME, IMF, IMS, IMVの区分があるが、それぞれの説明は此処ではしない。

(VIII)

次の記録文書は75年11月25日付けのPönig大尉からの例の主要部門XX/7への報告で、会合報告と云うタイトルがあり、IM《Hermann》との会合が25日の10時30分—12時15分にIMK《Casino》で行われたと記している。

先ずIMは先週の初め作家同盟党書記、同志Küchler、党地区書記、同志Sepp Müllerと彼らの間の会談が行われた事、その会談で三人は企画『ベルリン物語集』に関する作家同盟党指導部前での同志W. Kohlhaaseの説明に就いて協議したと報告している。その際同志Müllerは此の企画に反対する行動を展開するのではなく、それが出来る限り内部より破滅するよう方向付け、此の事

に就いての会談はアンソロジーに距離を置いている事が非常に明瞭な人々とのみ行われるべきで、誰がそれに適したパートナーか顧慮されるべきだと述べたと報告されている。

此の助言に基づき IM は作家 Uwe Kant をアンソロジーから引き離す為にベルリン作家同盟幹部員 Eberhard Panitz がそれに適したパートナーであると確信し、11月20日に会談する事に一致した。そして彼が Panitz の所に表れた時、同志 Klaus Höpcke 文化相代理が同様にそこに居て、同じ関心を抱いていた。Panitz は Uwe Kant との良き個人的接触に基づき彼と話をする用意があると直ちに説明し、11月22日会談し、Panitz は以下の事を確信した。

Uwe Kant は Plenzdorf と Schlesinger より声を掛けられ、アンソロジーの説明を受け、その際その背後に何も見なかったが、全アンソロジーの原稿の中に、彼の評価によれば少なくとも三・四編がその否定的発言に基づき DDR に於いて出版されず、確実にどの出版社も出版の用意があると宣言しないであろうと知った時、彼は驚いた。彼には既に此の企画から退く考えが起こったが、Panitz の勤める第九回党大会栄誉の為のベルリン作家同盟のアンソロジーへの参加には否定的であった。Panitz はそこで IM に Uwe Kant は非常に考え込み、確実に Plenzdorf, Schlesinger へ背を向けるであろうと報告した。しかし彼は意図的に彼の会談が個人的性格を維持し、その企画に反対する行動を臭わせぬ様に Kant に働きかけ、上述の IM と協議するように勧め、Kant はそれに応じる姿勢を示した。

IM はアンソロジー参加者の一人 J. Leskien が作家同盟書記、同志 Erika Büttner に此の件で向かった事を知っていたので、IM は Leskien と此の企画への彼の考えと問題に就いて詳細な対話をするであろうと Pönig は報告し、その対話の際に IM は以下の事を明らかにする事を試みるつもりであると述べる。

「Leskien は如何にそしてどの様な条件の下でアンソロジーの協力の為に獲得されたのか。」「政治的、文学的、芸術美学的方法の如何なる相違がアンソロジーの参加者達の間にあるのか。」「誰が此のアンソロジーの鼓舞者であるの

か。」(31)

最後に IM は Leskien が IM の情報により指示された時期にアンソロジーより引き下がる確約を得る様に試みるであろうと書いている。

続く記録文書は 11 月 27 日、IM 《Heinrich》が XX/7 部門 Cottbus 県官庁で Lieback 少尉に口頭で伝えたベルリンでの Schlesinger との接触の報告である。

彼は委任により Schlesinger に関係を断ち切らない為に手紙を書き、アンソロジーへの協力を断った。著名な作家達の間では見劣りすると云うその理由を後者は根拠がないとして残念だと答えた。IM は断ったにも係わらず短い物語を書いたが、12 月 2 日に彼が Schlesinger に Hinstorff 出版社での作家達の会合で間違いなく会うであろうがまだ何も云わないであろうと報告し、その原稿をクリスマス直前に初めて送ると述べた。その原稿はふざけた夢のような空想的で神秘主義的物語なので他の固いレアリズムと異なりアンソロジーの枠より外れ、Schlesinger 達は来る 3 月に彼と論議するに違いないと彼は報告している。その上、彼は Schlesinger の手紙を引用している。その中では共同の編集者の事が触れられ、誰もアンソロジーの他の寄稿者を知らず、編集者が欲する事を出来る惨めな状況を彼等は克服したいと述べている。

次の記録文書はベルリンの国家公安省 XX/7 部門への 11 月 28 日付け Wild 少佐の中間報告書である。

Schlesinger は 75 年 2 月以来処理の対象で、それは 75 年 8 月に確認された作戦計画に基づき成功していると述べてから、Hansdieter Schubert の IM の先駆的仕事による処理に触れる。先ず多くの IM が Schlesinger とその妻 Wegner の密接な知人友人の輪に入り、Schlesinger の信頼を得て、『自費出版』に関する作戦上興味深い情報を得たと述べる。それは以下のものである。

9 月半ば Schlesinger は党ベルリン地区指導部書記 R. Bauer とベルリン作家同盟役員達の協議に就いて非公式に知り、Stade を通して彼等のグループの比較的狭い輪の中でベルリン地区指導部の情報源を確認する為、吟味をさせた。それ以来彼は新しい接触には疑いを抱き、彼と Plenzdorf, Stade 間の雰囲気は

言い難い疑念によって特徴づけられた。しかし10月初め彼の住居で話し合い、相互に今一度絶対的信頼の念を確認し合った時、此の一時的状況は再度変わった。それでも上述の協議の内容を知って以来、彼等の企画の成功に就いて少しベシミズムが広がり、10月の『意味と形式』(Sinn und Form)誌 Nr. 5出現時迄継続した。此の号に於ける Volker Braun の『不完全な物語』(Die unvollständige Geschichte)の公表が彼等の間に新しい行動への強い衝撃を与えた。Braun の『未完の物語』(Unvollendete Geschichte)は彼等のグループでは「DDRに於ける一つの『有効な体系批判的文学』にとっての『信号』と『基準』と受け入れられた。Schlesinger は Braun の物語を今まで DDR に現れた『体系批判文学の最も有効なもの』と評価した。此の物語は僅かな頁だが Stefan Heym の『体系批判的全作品』をしのぐであろう。Heym 自身それを妬み心なしに認め、Braun の『勇気』によりはっきり感動させられよう。」(32)

Schlesinger が信頼している出版社『朝』(Der Morgen)の原稿審査係 Joachim Walther は Braun が「許可されるものの限界を百分の一ミリメートルに到る迄正確に測った。」そして「限界」の為に現在可能な尺度を置いたとの見解を述べた。

続いて国家公安省、人民警察、税関の収集資料の吟味結果と云う次の様な情報が書かれている。旅行に関する報告や手紙及び税関での監視によって Schlesinger の西ベルリン、西ドイツでの接触が確認され、1961年8月13日直後 DDR より逃れた D. Dröder が彼の密接な友人であり、その友情がアンソロジー用の彼の物語『青春の終わりに』のあの文学的作り話である。彼の許可された資料収集目的の西ベルリン旅行に際して彼は専ら Dröder に会っている事が評価されねばならないと。

更に彼が西ドイツ出版社の Lothar N. と接触しているが、その正確な性格は判らない事、彼はスイス、チューリヒ Benzinger 出版社の協力者の女性 Renate Nagel 博士との結びつきを維持しており、それは業務上のみならず私的なものであり、74年2月に彼は既に上記の物語の存在を彼女に報告し、それをその出版社で出す提案をしているが、まだ少しその物語に係わりたいと説明

した事、それ故に彼は長い間、その物語の素材に従事しているのが明らかな事が記されている。

また Heym に仲介されて彼が 74 年 5 月、München の出版社 Bertelsmann と接触し、Heym がその出版社で『案内——DDR からの新しい散文』(Auskunft-Neue Prosa aus der DDR) と云うタイトルでアンソロジーを提案し、Schlesinger の物語を『九』(Neun) と云うタイトルでその中に入れた事、それは 74 年秋に出版され、Schlesinger はそのやり方でその出版社と協定を結んだ事も記載されている。

此の記録文書の最後は人民警察の収集資料より、彼が 58 年 1 月 25 日 Weißensee で、彼が任務に就いている人民警察官を「ファシスト的な手段を用いるナチス」と罵倒した刑法 185 条による国家中傷の廉で注意を引いた事の記載である。

(IX)

引き続き 75 年 12 月の記録文書になり、最初は上記と同じ部門への Holm 少尉の 12 月 11 日付けの短い覚え書きで、12 月 10 日のベルリン作家同盟役員会議の情報である。先ず Plenzdorf が党の文化政策に関して挑発的な発言をし、取り分け文化政策の実践に於いて第八回党大会の諸決議は撤回された事、その文化政策の行き戻りは彼自身に関する事件で証明できると発言した事。Jurek Becker はそれに同意し、その際に非常に個人的なやり方で文化政策問題に於ける「独断的」姿勢の政治局員 Paul Verner を攻撃した事。更に二人は他の役員達の討議にも係わらず、その発言を撤回しなかったとある。

次に同じ部門への大尉 Pönig の 12 月 15 日付け文書が続く。会合報告とのタイトルで、IM 《Martin》と 12 日 20 時より 21 時 15 分に会っている。

前の彼の会合報告と同様、IM の個人的様子に触れてから、ベルリン作家同盟党基礎組織の選挙報告集会最中に於ける作戦上の対象作家達の態度に就いての報告が書かれている。その報告は別の IM 《Hermann》の報告と一致していると述べてから、IM が Uwe Kant と例のアンソロジーに就いて話し合い、ア

アンソロジーの政治的底意と敵対的性格を後者に説明し、後者も既にそう考えた
と発言したと述べている。彼の考えの原因は取り分け個々の寄稿の内容を知っ
た事にあり、彼は Heym の寄稿を決定的に敵対的と見なし、その公表に尽力
する意図は全くないと IM に発言した。此の状況を IM は、その寄稿を取り
下げ、その企画同様その組織から引き下がる約束を Uwe Kant から取るのに
利用した。

IM は同じ様な姿勢を取る様に他の作家達に働きかける事をも要請し、Uwe
Kant は了解し、その目的の為に次の作家達の集まり迄沈黙し、その集まりで
他の作家達を前にして Heym の寄稿の敵対性を指摘し、後者の寄稿をアンソ
ロジーから外すか彼の寄稿を取り下げるかを要請すると提案した。彼は最初の
集まりでの Kunert の発言を考慮して、この姿勢が一連の作家達に効果を発す
との見解である。IM は上述の行動以前に Kant と協議する事で彼と一致し、
それには国家公安省と党の助力の必要を説いた。

Rolf Schneider から此のアンソロジーへの参加を告げられた事を述べてから、
IM は彼にその参加を思い止まるように暗示し、彼はその企画から引き下がる
事を約束出来ると語り、企画の正当性に疑念を抱き、Kunert と論じ合ってい
る。Kant と Schneider はこの企画では参加出来ぬのであり、Schneider は更
に IM に対し、彼と Kunert の脱退によってその企画が崩壊するであろうと発
言した。

最後に此の記録文書の作成者 Pönig 大尉は任務として、「IM は Kant,
Schneider と、アンソロジー企画の状況の変更に関して恒常的かつ時期を得て
情報を伝え得る様に更に接触を保つ。」(33)と書いている。

〈未完〉